

資料3 介入事例

子どもの年齢: 幼児後期 学童前期

病名: 先天性代謝異常

介入対象者: 母親、子ども

| 介入日時 | 介入コード | 介入理由・前回からの評価 | 実施内容 | 子どもの反応 | 保護者の反応 | 今回の介入評価と次回への提案 |
|------|----------------|--|--|---|--|--|
| 12月 | Bp-2 | チェックリストを実施した結果から、母親:「どうせAには言って、わからないから。早く車に乗って行って、車に乗ってから病院に行くよとは言えけれど、そのほかは特に何も言っていないな。」母親は、治療についてAくんに説明するということを考えていない。Aくんは理解できない(わからない)と思っている。 | 説明をしないで病院に連れてくることは、Aくんを騙してことになる。Aくんが家族を信用しなくなる可能性がある。Aくんに病院に来る理由を説明することが大事である。Aくんにとって病院に行くことは嫌なことであるが、嫌なことでも自分の身体のために大切なことと理解して、自分から治療に向かえるようになるために、今、しっかりとAくんに説明することが大切であると、母親に伝えた。 | 看護師を一目見るが、その後は声をかけても看護師を見ようとしなかった。 | CNSの話を実際に聞いていた。母親:「ええ、Aに説明するなんて、そんなこと思ってもいなかった。できるかな。家を出る前は忙しくて、でも、やってみようよ。」 「私もパパも病気がわかってから、頭が真っ白で、どうしていいかわからなくて、私たちが混乱して、でも少しでもなにか手立てがあるならやって欲しいと思っていたから、必死だった。Aがどう思うかと今まで考えられなかった。」と話していた。 | 今回の介入評価と次回への提案 評価:説明した内容を理解はしている。しかし、「実際に母親がAくんに説明することができる」と判断できるところには至らない。 Aくんが治らない病気、進行していく病気であることを母親自身が受け止めていない。Aくんに、どのようにかわかっていったらよいかわからず戸惑っている。Aくんの力を信じる。というところが、信じきれないようである。すぐに変化することを期待するのではなく、時間をかけて少しずつ介入していくことが必要。 次回への提案:「外来治療の日は、家を出る前に必ず病院に行って点滴をすることを説明する」と約束した。2,3か月後に面接をすることを伝えた。 |
| 12月 | D-c1,D-p2 ,Dp3 | 毎回、点滴をするときに大暴れをして抵抗する。 | 外来Nsが、点滴をするまえに、抱っこですか、ひとりで椅子に座ってするかと選択肢を出してAくんに聞いた。Aくんから返事があるまで、辛抱強く待つようにした。 暴れてしまったが、それでも頑張れたことを認めて、褒めた。 母親に、頑張ったことをしっかりと褒めるように促した。 | ひとりで椅子に座ってやると返事をしたが、点滴をしようとすると、大声を出して抵抗する。外来看護師が説明をするが、まったく聞き入れない。外来Nsが抱っこをしておこなった。 針を刺すときは、点滴をする側の腕を他の外来Nsが押さえて行った。 点滴中は、ゲームをしながら静かに過ごしている。点滴をしていることを嫌がることはない。 | 暴れてしまう姿をみて、「だめなんだよな」とつぶやく。外来Nsに促されて、Aくんを褒めた。 | ほとんど自分の意思を伝えたことがないAくんが、「椅子に座ってやる。」と意思表示したことは、大きな進歩である。 目標は椅子に座って点滴ができること、声は出してもよいが、動かないこととした。 |
| 3月 | Bp-3,4,5 | 初回面談時の課題について、その後のかわかりを確認するために介入した。 | 前回の課題について話し、その後の様子を聞いた。Aくんへのかかわり方を両親で相談できていること、両親のかかわり方がよいからこそAくんがかわってきたことをしっかりと伝えた。母親が頑張っていることを認めて、褒め称えた。 | CNSがAくんに声をかけると、CNSの顔を見る。「今日はどうして病院に来たのか」と聞くと、「点滴をする」と答えた。 | 前回CNSと面談した内容を父親に話していて、父親も協力していると話していた。 母親から、「ちゃんと病院に行くことを話している。Aも病院に行く日がわかっていて、前の日には準備をしている。もっていくゲームを決めている」と話があった。笑顔で話している。 | 外来に治療にくることを説明できている。 Aくんは治療(点滴)に来ることを分かって、来院できるようになった。 親が意識してかわかることで、Aくんが変化していることを実感している。 次の段階として、病気をどのようにAくんに伝えていけるかを医療者と一緒に考えていくこととした。 |
| 3月 | D-c2 | 前回介入から3か月が経過している。その後の評価のために介入した。 | 外来Nsは毎回、「今日はどうする」と、Aくんの希望を聞いた。 動く危険なこと、1回で終わらなくなることを説明して、動かないことを約束した。 「偉くなったところをCNSに見せよう」とAくんに声をかけた。 | ひとりで椅子に座って点滴をする。針を刺す瞬間は、「痛い、痛い」と大声を出す。針を刺す瞬間は腕を引いてしまうため、Nsが押さえている。 母親に褒められると、頷く。 | 暴れなくなったことを「動く危険なやつ、わかったんだと思う。成長したよな」と話していた。Aくんをみて、「偉くなったよな」と声をかけている。 | 毎週外来で点滴をしている。 外来Nsとの関係性が築けている。 外来Nsの介入がAくんに大きく影響し、嫌だと思っても頑張ることができるようになってきている。 |

| | | | | | | |
|-----|-----------------|--|---|--|---|---|
| 7月 | Bp-3.4.5 A-1 | 「病気のことをいつ頃教えたらいいんだろう」と母親から相談があった。 | Aくんへの説明について、転びやすいこと、上手に走れないことは、そういう病気であると説明する。そのために点滴(薬)をして治療をしている、と伝えることを提案した。病態を伝えることではなく、病気によってどのような症状が体に現れているか、Aくんが自覚している症状で説明すると理解しやすいとアドバイスした。 Aくんとのかかり方について、両親はAくんの状態や心理的な変化をきちんと察知して、適切に対応していると伝え、褒めた。母親が自信を持てるようにかかった。 | 「おはようございます」「さようなら」と医療者と挨拶ができるようになった。 Aくんが自分でNsや医師に体調を伝えることがない。幼稚園では「疲れた」「できない」と自分から言うことがある。 | 「Aくんが自分とはみんなと違うと思っている、同じようにできないと感じている、他の子よりもいろいろなことが遅いからAとしてもそれが嫌なんだと思う」とAくんのことを捉えている。 CNSの提案に「それなら伝えられる、自分でわかっていることなら、説明すればわかと思う」と話し、納得した様子であった。 | 母親はAくんが自分の身体に関心を持ち始めていることを察知することができる。 Aくんに説明していくタイミングとしては適している。 母親は病気や治療について、Aくん説明することが大事であることを理解している。 両親からAくんに、病気のことを徐々に、折に触れて、説明していくことができると思われる。 Aくんが自分の病気をどのように捉えている(理解の程度)か、家族と一緒に把握していく。 外来時は、医師・看護師からもAくんに説明をしていくことが必要である。 |
| | D-c1.C-p3 | 前回からの評価のために介入 | 外来Nsは、「今日はどこにやろうか」とAくんに選択できるように声をかけた。 針を刺し、刺入部を固定、手をどのように固定するか、Aくんと相談しながら行った。 全(動かず、頑張れることを褒めた。母親に声をかけ「すごく偉くなったんですね。さすが小学生ですね」と母親と一緒に成長を認め、褒めた。 | 点滴をするときは、ひとり椅子の座って、机の上に自分から腕を出す。針を刺すときは大声は出さない。腕もまったく動かさずにできる。 | 母親は笑顔でAくんの頭を触りながら褒める。「すごく成長しましたね。こんなに変わるんだね、驚いちゃうね。」「ずっとこれを続けなくちゃならないから、それをどう思うのかな」とCNSに話した。 Aくんの成長に一番影響したのは、弟が点滴をするとき「僕は平気だよ」と言って、動かず、泣かずに、最初から一人でできた場面をみたこと。兄としてのプライドが成長につながったと感じている。 | 母親が感じているように、弟が点滴を頑張る姿をみたことが、Aくんの力を引き出すきっかけとなった。他者とコミュニケーションをとるAくんにとって、外来Nsと関係性を築けたことも大きな力となっている。目標は達成できている。 |
| 翌7月 | Ep-5.6 | 学校の先生や友達に説明すること、協力を得ることができず、困っていた。 直面している問題として、「運動会の種目に参加させてもらえない」と困っていた。 | <アセスメント> 母親は学校と調整する方法が分からない。保育園の対応と学校の対応が違うことに戸惑っている。担任教員との関係性がまだ築けていないことも不安につながっている。 学校生活で制限されることについて、具体的な内容を主治医と相談をして、主治医から参加を許可する手紙を出すことを提案した。また、学校の先生に外来にきてもらうこと、CNSから学校に電話をすることもできると話した。 小学校と保育園の違いを説明し、丁寧にかかわってくれていた保育園から、環境が変わり、Aくんと母親が戸惑っている思いを共有できるように傾聴した。 | CNSが学校は楽しいと聞くと、首をかしげる。担任の先生の名前を聞くが答えない。 | 母親は、学校の先生に「無理をさせずに、Aくんのペースでできる範囲でやらせてほしい」とお願いしただけなのに、学校側は、何でもかんでもダメと言って制限される。保育園のときは保育士がAくんのことをよく知っていてくれたので、できることはやらせてもらえたと感じていて、学校の対応に不満をもっていた。 | 母親は困ったときに、適切に相談をすることができている。 CNSが話した内容は理解している。まずは母親が自分で学校の先生に相談することができると思う。 その結果を踏まえて、病院側がどの程度、サポートするかを相談することにした。 |
| | | | 学校教員は病気と今のAくんの病状がよく理解できないため、教員も不安であると。なので、できるだけ具体的に、Aくんができることを手伝いが必要なことを伝えるように。家族はできるだけAくんができることはやらせたいと考えていることもしっかりと伝える、などのアドバイスした。 | | CNSとの面談のあと「ああ、そうか、学校の先生に話しているのかもよくわからなかった。そうだね、私ただだってAの病気はよくわからないから、学校の先生はもっとわからないよね。先生に話して、病気だから特別って思われるの嫌だったから、あんまり言わなかった。うるさい親って思われるんじゃないかなと考えたりして。話して大丈夫ってわかれば、先生と話せると思う、話してみよう」と話していた。 | |
| 11月 | | 両親から「大きくなっていく先がみえない。どうなるのか想像ができない」「この先、学校と上手く付き合っていくかな」という言葉が聞かれた。 | 外来NsとCNSで相談。 母親がAくんの成長して先を考えられるようになるため、また学校とどのように調整しているかなど、実際に経験している同じ病気の中学生(Nくん)に会ってもらうことを提案した。 酵素補充療法を行っている同じ病気の患児(Nくん)と母親との面談を実施した。 | 点滴中は寝ていた。覚醒後、NくんとNくんの母親がAくんに挨拶するが、Aくんは返答しなかった。 | Aくんの母親とNくんの母親は、ともに涙みながら会話をしていた。 診断された当初の不安な思い、子どもの身体的な変化、学校の環境にかんする思いを話していた。 | Aくんの母親は人見知りをする、思いを伝えることが苦手なタイプであるが、今回の面談は、母親が「話をすることができてよかった」と思える結果であった。 同じ病気を抱える子どもの家族と話すことで、同じ立場だからこそ共有できる思いを言葉にすることができたと考えられた。 セルフケアの促進、自己決定能力の育成、学校との連携について、母親の意識を高めることにつながった。 |